

令和6年度第2回農林水産技術センター評議委員会概要報告

◇日時：令和6年11月13日（水） 13:30～16:00

◇場所：京都リサーチパーク4号館ルーム2

◇出席者：別添出席者名簿のとおり

1 開会（小瀬農林水産部長あいさつ）

令和7年度からの実施を目指す新規課題について、幅広い観点からの御意見、御助言をいただきたい。機能強化の取組については、ソフト面では昨年度設置した京都フードテック研究連絡会議を活用し、京都ならではの試験研究を相互の強みを生かして進めて参りたいと考えている。ハード面では、研究の重点化とそれに伴うハード整備について、検討を進めているところである。これについても、御意見を賜りたい。

京都フードテック構想に基づき、農林水産業の機能強化、或いは効率性や生産性の向上を高めて参りたいと考えており、そのために農林水産技術センターがしっかりと役割を担っていききたいと考えている。

本日はそれぞれのお立場から、忌憚のない御意見をいただきたい。

2 評議委員紹介

3 協議事項

(1) 令和7年度新規課題の評価について（別紙議事録1参照）

- ・各部門研究センターから説明、質疑応答
- ・11/27（水）期限で評価票を集約
→結果について評議委員長とセンター長で確認の上、報告する

(2) 機能強化チームの取組について（別紙議事録2参照）

- ・農林水産技術センターの機能強化に向けてテーマごとに組織したチームの取組状況について、農林水産技術センター長より説明

4 報告事項

- (1) 令和2年度終了課題フォローアップ調査結果
- (2) 令和6年度タスクチーム活動中間報告
- (3) 農林水産技術センター主催のセミナー、報告会等の開催予定

5 閉会（蘆田農林水産技術センター長あいさつ）

協議事項（1）新規課題の評価（意見・質問）

（新規発生ウイルス（CABYV）の発生生態の解明と防除技術の確立：評点 4.4/5 点 以下同じ）

- アブラムシの発生が見られたら薬剤を散布するというので、ウイルスが防げるのか。最初からアブラムシの駆除をするのか。
- アブラムシ以外でも媒介するかもしれないとのことだが、ウイルスが変異しているのか、それともその今まで知られてなかったホストが見つかったということか。
- 変異株が同定されたということだが、1種類だけなのか。発生ほ場率 29.8%と、既に府内でかなり発生しているようだが、どれぐらいレースがあるのか。どういうDNA分析するか、核酸分析するかで変わると思うが、どうか。また、海外で弱毒性ウイルスの利用はされているのか。
- 試験研究計画としては、従来どおりの新規病害虫発生時の試験法だと思うが、メロンの産地である北部地域への侵入防止という視点と、既に発生している南部のキュウリ産地での防除という視点では、とるべき対策が異なるのではないか。そのための北と南では研究戦略が異なると思う。それぞれに特産品があるのだから、それに合わせた防除戦略を立てる必要があるのではないか。
- そのためにも、ウイルスの変異株の媒介虫を早くはつきりさせる必要があるので、従来の手法にとらわれない研究戦略を論議すべき。
- 媒介虫が本当にアブラムシなのかどうかは、早く明らかにしないと研究が始まらないように思う。ある程度見当はついているのかもしれないが、大事なことなので早く進めてほしい。
- CABYVが感染している株について、他のウイルスの感染状況はどうか。

（変色しにくいてん茶の茎ペーストの開発および茎ペースト入り商品の開発：評点 3.3）

- てん茶の茎は、棒茶として利用できないのか。ペーストではなく粉末ではダメなのか。
- てん茶は抹茶として、チョコレートやアイスクリームなどにも利用されている。てん茶の生産量が増えているのはそのような飲用以外の用途が増えているからか。
- 抹茶は用途により求められる品質が異なる。食品向けなら品質が高いもの、抗菌作用が目的なら機能性成分の多いものと、用途によって求められるものが違う。開発する商品のターゲットを明確にする必要がある。ホテルや料亭での利用を想定しているとのことなので高級志向のようだが、それらの需要が今後海外でも伸びると見越しているのか。
- ペースト加工はどこがするか。年間通して操業できるか。茎の集荷は誰がするか。茎の保管場所、運賃なども含めて集荷から加工までの流れを研究と同時に考えておく必要がある。
- 酸化防止方法として限りなく窒素封入するという方法は検討されているか。できるだけ自然素材で酸化防止剤を検討することだが、健康志向の高まりで添加物を避ける人も多い。また遮光も考えた資材の検討が必要ではないか。

- てん茶の茎ペーストは、マーケットの需要が確実にあることを調査したのか。
- てん茶の茎ペーストが、他よりも優れていて、需要とマッチしてるのか。お茶のペーストや粉末もいろいろな商品がある中で、本当にこの商品の需要があるのかを聞きたい。
また、退色については温度の影響も大きいと思う。遮光して冷凍という方法も考えてはどうか。現状業務用で冷凍食品は利用されており保管場所もある。冷凍なら無駄な添加物も使用せずに済むと思う。
- 価格も重要。この価格では使えないと言われるようなことがないよう、ターゲットに受け入れられる商品となるよう整理されたい。
- 高濃度と低濃度の違いは何か。濃縮しているのか。
- 手摘みと機械摘みで値段が違うのはなぜか。
- 粉末の状態で利用できないか。お菓子に利用する場合は粉末で小麦粉に混ぜるなど、ペーストでなくても良いように思う。ペーストはざらざらしないのか。

(中食需要に対応した生産性の高い金時系高リコピンニンジン新品種の育成：評点 3.7)

- 金時ニンジンの特性として抽苔しやすいため、その特性を引き継ぐと栽培時期が限られる。
中食需要に対応するには栽培時期が拡大しないと難しいのではないかな。
- 根長が短ければ栽培期間も短くなると思うので、播種を早めることは可能だと思う。新たに遺伝子マーカーを開発するとのことだが、既存のマーカーだけでは選抜できないのか。
- マーカーの開発に以前も金時ニンジンを使っているのだから、同じマーカーしかできないのではないかな。新たな視点が必要ではないかな。
- 短くて太い金時ニンジンができればよいと思う。DNA マーカーを用いて、3 世代目で目指す性質のものができそうなのか。
- 高いリコピン含量が安定して得られれば、いろいろな展開ができると思う。目標を達成できそうか。
- リコピンを増やすとカロテンが減らないか。機能性を高めることでビタミンが減ることにならないか。
- 金時ニンジンにはそもそもカロテンは含まれていない。作られない仕組みになっている。

(地域の特色を活かした簡便な NH₃ 回収技術による鶏糞堆肥化における臭気軽減手法の検討

: 評点 4.6)

- 回収したアンモニアはどんな形か。回収したアンモニアはアンモニア発電に提供するなど、用途は考えているか。
- 経営面から大事な視点だと思う。回収したアンモニア水はどうやって保管するのか。
- 麦稈ロールベールにアンモニアガスを注入すると、リグニンが分解して牛が良く食べるといいう研究成果がある。将来的には、鶏だけでなく地域の中での循環も考えてほしい。
- 回収だけでなく、アンモニアを分解する方法は検討しないのか。
- 小規模から実機サイズにするときに、どれくらいコストアップを押えられるかが問題。

(鰹節搾りかすの鶏用飼料としての活用：評点 3.5)

- 搾りかすの栄養成分はどうか。素早く乾燥させる方法が必要ではないか。フリーズドライはコストが高いが、何か良い方法はないか。
- 手元の情報として成分は把握しておくべき。成果を普及するためにも必要。
- 搾りかすの回収システムはどう考えているのか。
- 個別農家に対応するのはよいが、搾りかすを適切な状態で出してもらえるかが問題。
- 出汁の搾りかすは鰹に限らないと思うがどうか。
- 乾燥より発酵させてはどうか。どれくらいで腐るかを調べておく必要がある。

【別紙議事録2】

協議事項（2）機能強化チームの取り組みについて

- 公的機関としては「想定連携先」はよろしくない。連携先ありきで内容を考えたように見える。「必要な技術」を挙げて公募するのが本来。例えば「匠の技」には「触感」も含まれるが、この点が想定連携先には見られない。抜け落ちている。みどり戦略に関しては病虫害に終始している。
- 「匠の技」がすべてデジタルで伝承されるのか。匠が五感で感じる柔軟な感覚が受け継がれないのではないかと危惧している。
- 果樹園の巡回をドローンにさせると、枝変わりを見つけられるだろうか。枝変わりから新品种が生まれたりする。五感の全てをデジタル化するのは無理ではないか。
- 普通の技術のスマート化は、基本的な技術が初心者でもできるようにするもの。「匠の技」のスマート化は聞こえは良いが、少し違うと思う。
- 農業の工業化が進んでいるが、京都府としてはフィールドにおける高度化を目指すという考えで良いか。
- 気候変動をどれくらいの重点で考えるか。単に高温だけでなく、土砂災害からどう復旧するかなども考えておく必要があるかもしれない。
- 概ねこの方向性で良いが、実際に取り組む際にはいろいろと検討すべきところがあるだろう。
- 完全調理食品とは何か。企業との連携は必要だが、連携する企業の技術や設備が研究開発に大きく影響する。農技Cでできることや得意とする分野、例えば基礎研究のデータを提供することで、企業が加工技術や加工品を開発するという連携ならイメージしやすいが、農技Cが完全食品を開発するというのは無理がある。どういう研究をするのかもう少し絞った内容で書いた方が良い。
- 京都府の現状や特色をもっと鮮明に示し、そこにある課題を解決するという打ち出すことが必要。
- 将来の農業の方向性に関することなので、今後も色々聞かせていただきたい。

令和6年度第2回京都府農林水産技術センター評議委員会出席者名簿

令和6年11月13日(水)
京都リサーチパーク 4号館ルーム2

◇評議委員

板井 章浩	京都府立大学大学院生命環境科学研究科 教授	
長島 啓子	京都府立大学大学院生命環境科学研究科 教授	御欠席
齋藤 敏之	京都産業大学生命科学部 非常勤講師	
三田村 啓理	京都大学フィールド科学教育研究センター 教授	御欠席
飯田 訓久	京都大学農学研究科 教授	
深見 治一	京都先端科学大学 名誉教授	(評議委員長)
北村 實彬	NPO法人 近畿アグリハイテク副理事長	(副委員長)
牧 克昌	京都府農業協同組合中央会代表理事専務	
川村 幸子	京都府生活協同組合連合会理事	
齋藤 三映子	有限会社 エスアールフードプロデュース代表取締役	